令和５年度台湾人介護専門家研修事業
訪日研修報告書

日本台湾交流協会では日台共通の重要課題である高齢化対策として、日本の介護技術・介護産業の台湾への展開・普及、台湾における介護労働従事者の社会的地位の向上と高度専門人材の育成を目的とした台湾人介護専門家研修事業を平成30年度から実施しております。令和５年度は、４年ぶりに介護施設での実習も再開し、８名の介護施設責任者（介護士、栄養士等）が約６週間、長野県にある佐久大学と佐久市内の施設で研修を受けました。日本での研修をどのように感じ、また研修での成果を台湾でどのように生かしていく計画を立てているかご紹介したく、１名の報告書の日本語訳を掲載します。

他の研修者の報告内容につきましても、ぜひ当協会のサイトでご確認ください。https://www.koryu.or.jp/business/public/

私立宥安居家長照機構（台東県）行政監督
潘盈蓁

まずは日本台湾交流協会が今回の訪日研修の機会を与えて下さったこと、アジアン・ワイズ社が研修の周到な手配をしてくださったこと、佐久大学のプロフェッショナルな教師陣のご指導に感謝を申し上げます。日本における38日間の研修訓練で、日本の長期介護制度を深く理解し、佐久地域のケアシステムを学ぶことができました。研修期間中は、関連施設で使う常用介護日本語を理解するだけでなく、研修で得た知識を実際の実習作業に応用しつつ、振り返りと検討を繰り返しました。より多くの素晴らしいケア理念と方針を台湾に持ち帰り、思いやりと温かみにあふれた、地域全体のケアシステムを構築したいと思っています。また、今回の研修では、高齢者介護と認知症患者への思いやりあふれるモデルへの理解を深め、認知症患者の尊厳と彼らとの意思疎通のこつを重視する姿勢を深く感じ取ることができましたが、これは、台湾と大きく異なる点でした。

研修中は、様々な機関を視察し、日本特有のサービスモデルや文化をより深く理解することができました。布施屋と結いの家等への訪問では、多機能型ショートステイと全日型宿泊ケア施設の統合

施設での活動は自宅にいるかのよう

温かみがあり、施設には見えない布施屋の外観

成功モデルを見ることができました。特出する点としては、高齢者の尊厳を尊重し、多職種連携でスムーズに情報共有することにより、高齢者の状態は全方面から見守られており、各分野の専門家の業務を統合した個別ケアプランが、高齢者の身体機能と生活の質を向上させていたことです。このモデルでは、高齢者のニーズに近づけたケアプランを提供するだけでなく、ニーズへの全面的な考慮と心遣いが展開されており、介護サービスの多元化と高齢者の尊厳を尊重することの重要性を深く認識することができました。今回の経験は、今後の高齢者介護分野における私の努力指針となると思います。よりよいサービスに応用し、台湾における地域ケアシステムをより完璧なものに発展させていきたいと思います。

施設実習

布施屋での実習中、日本のデイケアサービスの運用モデルを深く理解することができました。施設のサービスフローは微に入り細にわたり人間性に富み、特に入浴手順は、尿管や腸ろうの有無にかかわらず、十分かつ快適な入浴時間が満喫出来るようになっていました。私と一緒に作業をした介護士は、プロフェッショナルであるだけではなく、ケアする過程においても、細やかな注意事項や思いやりについて伝授してくれました。高齢者に温かく、忍耐強く対応すること、ケアの細部にまで気を配ること、さらには高齢者の行為を尊重することといったケアスタイルに深い影響を受け、私自身の今後の介護目標に全く新しい啓発となりました。

結いの家特養施設の実習では、看護師の職責に

ショートステイが必要な高齢者には温かみのあるデザインの部屋が提供される

食事も入浴スペースも、自宅にいるようにくつろげるデザイン

傷口の処理、服薬の管理から健康管理までもが含まれていることを知りました。特に挙げたい情報として、看護師は、介護者が高齢者一人ひとりのニーズを把握できるように、施設入居前の情報を含むデータを非常に細かく記録・収集していたことが挙げられます。服薬する人の名前､服薬日時、服薬方法が全て明確に包装材に明記された薬品管理の形式化も印象的でした。特養施設のケアプランは、台湾におけるソーシャルワーカーの個別化サービスプランのように、介護目標と作業分担の明確化の一助となります。こうした形式化された管理方法から、今後の台湾の施設における記録ノートのデザインをより効率的なものに応用する方法について考えさせられました。

この二つの施設での実習において、布施屋のデイケアの人間的なケアと、結いの家特養施設のシステマティックな管理方式は、いずれも参考に値するものであり、深く感動しました。特に台湾におけるケアサービスをどうやって高齢者のニーズに近づけるかという点においては、具体的なアイデアも浮かびました。佐久市と私が働く台東県全体の地理的環境の相似性から、両地域の協力関係を促進し、台東の長期介護サービスの品質向上を図ることができないかと考えています。今回の実習経験により、台湾の介護分野はさらに進歩・発展できるものと期待しています。

現状における日台間の違い

日本と台湾の認知症ケアの現状を比較すると、両者には明らかな違いがあります。日本では、認知症の高齢者の尊厳を尊重することを強調し、豊富で多彩な創造的なプログラムと療法を提供して

おり、また、完璧なケアシステムとハイレベルな専門人材を配した優良なケアが確保されています。また、家族の参与もそのケアモデルの中の重要な一環です。対する台湾では、日本のこうした尊厳と尊重の強調、ケアする側のコミュニケーション技術の強化、家族の参与の奨励並びに創造的プログラムと療法を増やす点は大いに参考になります。それとともに、今より一層人間性のある完璧な長期介護システムにレベルアップをさせて関連分野の研究と政策制定を推進していけば、認知症高齢者のニーズに対応できるようになると思われます。

日本の介護方式との比較を通じ、台湾での生活リハビリと介護分野の改善点を発見することができました。現在、台湾では、日本に類似した中間施設がなく、専門的なリハビリサービスは統一規格と多職種連携に欠けていて、それが効果にも影響しています。日本では、コミュニケーションと介護マナーの分野において、良好なコミュニケーションが非常に重要であると強調していますが、台湾の介護人材は、常に多すぎる文書処理や就労ルールにより、往々にして作業を素早く完了させることが最優先となってしまい、高齢者への対応には温かみに欠け、彼らの心理的要求にまで対応出来ない状況にあります。また、日本の長期介護サービスでは、高齢者の尊厳と自立能力の尊重をより強調していました。

このように比較することで、私は日台双方の介

護モデルと価値観の違いを意識すると同時に、台湾の介護システムの改良の余地に気づきました。台湾で強化すべきなのは、尊重、尊厳、コミュニケーション技術、家族の参与といった点です。日本の経験から学んだこれらのことは、今後の台湾の高齢者介護システムの発展に深く影響していくことと思います。

今後への期待

今回の貴重な研修経験によって、特に多職種連携と高齢者の尊重といった分野での日本の介護システムの卓越した進歩を深く理解しました。日本に比べて台湾の介護システムには、まだ多くの学びと改善の余地があります。今後、介護人材の訓練を強化し、尊重と尊厳についての認識を深めさせ、同時に多職種連携と家族の参与を促進していき、国際的に最良の実践モデルを鑑にして専門レベルを向上させていけば、台湾の高齢者介護システムは、より一層完全なものとなるでしょう。

今回の研修では、能力の衰えた高齢者の尊厳を尊重し､支援することが良質な介護を提供するキーポイントだということを強く意識しました。日本で学んだモデルと価値観を台湾の地元のサービスに溶け込ませることで、現地の高齢者のニーズにより近づく長期介護システムを構築できるものと期待しています。こうした改良によって介護の質を向上できるばかりか、台湾全体の高齢者は、周到かつ尊重される介護サービスを受けられるようになるでしょう。

貴重な研修機会を与えた下さった関係者の方々に改めて感謝申し上げます。

台東基督教医院栄養課　課長　營養師
李欣容

日本台湾交流協会、アジアン・ワイズ社及び長野県の佐久大学の共催によるプログラムにおいて、台湾で様々な業種で働いている我々に、先端の高齢者介護の学習機会を提供いただいたことに感謝します。また、訪日前には、王珠恵先生が今回の研修に対する我々の考えとそれぞれの実務上の課題について聴取くださり、研修カリキュラムに反映してくださったことに感謝します。６週間の研修期間で見聞したことを振り返ると、前半の３週間のカリキュラムには主に次のような内容が盛り込まれていました。

(1)佐久大学における日本の介護の現状理解、
(2)介護の基本技術の学習、
(3)地方公民館の役割を理解（予防保健と長期介護紹介機関）、
(4)日本の地域文化体験（信仰の場の参拝、健康推進のための森林浴トレッキング体験、入浴文化体験）、
(5)研修期間中に介護日本語を応用し、研修後半にはデイケアセンター等の施設において、専門人材に就いてケア方法を学ぶ（①厨房職員や栄養士とデイケアセンターでの食事提供、施設利用者自身ができる範囲で食事の支度を行うための支援、②プログラムの付き添い、③入浴介助法学習、④看護師の業務見学、⑤物理療法士の地域活動見学等）。

異なる文化背景と介護の歴史に触れることは新しい生活体験であり、これまで培ってきた専門分野に対する新鮮な衝撃でした。以下に研修期間中に学び、見聞し、得られたものをまとめました。

長野県佐久市を初訪問－長寿地域での生活

研修期間中に学んだ日本の高齢者介護の印象を振り返ると、まず思い浮かぶのは、宿舎近くの岩村田駅です。駅の外観は素朴でかわいらしく、とても歴史があるように見え、実際、1915年から利用されている駅でした。歴史がありながら、とても現代化された機能的な駅で、今でも近隣中学生の通学用の駅として利用されており、東京行きのＪＲ線の指定券もここで買うことができ、とても便利でしたが、私の見た佐久市の高齢者介護も、高齢者人口の高い地域でありながら、理想的な介護環境にあるという点で、この駅と同じだと思いました。

（１）佐久市野沢会館（生涯学習センター）視察

生涯学習センターは、地域住民の徒歩圏内に位置し、在宅介護サービス事務所も入っています。生涯学習センターには視聴覚室、多機能教室、料理教室等多くの学習スペースがあり、ホールでは多くのグループ活動情報を見ることもできます。視察時には多くの高齢者が授業を受けに来ていましたが、中でも、最も印象的だったのは、６０歳以上が対象の人材募集ポスターでした。この会館では高齢者の職業仲介を行っており、この地域が高齢者の能力と専門性を労働力として重視しており、フレンドリーな環境と政策で、高齢でも働けるという概念が日常に浸透していると感じました。

（２）長寿地蔵尊（ぴんころ地蔵）

長野県での健康寿命は日本でも１，２を争います。なおかつ佐久市は医療サービスが完備されており、２００３年、成田山薬師寺の参道に建立された長寿地蔵尊は、佐久市の象徴として地元住民の健康長寿の祈願対象となっています。地元の健康促進活動でも、長寿地蔵尊（ぴんぴん）の発音は元気の象徴となっており、高齢者と地域住民に親しまれています。研修カリキュラムの中で佐久市の栄養士が長寿人口調査結果を共有してくれましたが、健康的な体形を維持し、日常的に趣味を養うという他、食生活に関するアンケート調査において発見された長寿食の特色は以下のとおりでした。

①腹八分目、②塩分控えめ（1日４－６グラム）、③おやつは控えめ、④タンパク質をよく摂る。

（３）森林浴

森林健康歩道の設計も佐久市が推進する健康促進プログラムの一つです。森林浴ガイドは、退職した看護師で、植物の説明やルートに沿って配置されている多くのリラックスプログラムを紹介してくれます。ルート上には森林トレッキングが血圧を下げるといった関連研究を紹介する看板が設置される等、トレッキングのモチベーションが上がる様々な仕掛けがありました。

佐久大学での短期学習―「心」を重視した高齢者介護のプロ

短期間のカリキュラムではありましたが、毎回のカリキュラムでは、教授や王先生がいかに深く高齢者の尊厳を理解し、維持させるべきかを伝えようとしているか感じ取ることができました。日本の長期介護は、CURE から CARE へと発展してきたそうです。盛岡理事長が「私たちの専門性が高齢者を束縛するツールとなってはいけない、すなわち、過度に専門的な医療行為で目前の疾病を解決しようとすると、高齢者の本当のニーズが見えなくなってしまうのだ」とおっしゃったことが深く印象に残りました。介護分野で発展段階にある我々は、今回のカリキュラムで新たに、また重点的に、介護の専門性についての概念を学びなおしました。

（１）認知症の高齢者の尊厳の維持について理解する

認知症ケアは、変革によって、認知障害によっておこる問題の解決から問題行為の背後にある原因を理解するという方法に移り変わってきました。前者の介護方式は多くが介護者中心のものであるのに対し、後者は原因の理解から始まり、人を中心とした思考で実践し、介護される者の尊厳を保つものです。カリキュラムの中で王先生は、事例を挙げつつ、我々に思考練習をさせてくれた際、認知障害行為の背景にある要素を注意深く観察することを強調されました。「周辺症状」の原因の多くは、本人が時々漏らす情報にあるものの、特に中高齢者に対しては、ある行為がすなわち認知症状であると軽易に決めつけてはいけない、とも教えられました。

（２）適正な補助用具の使用

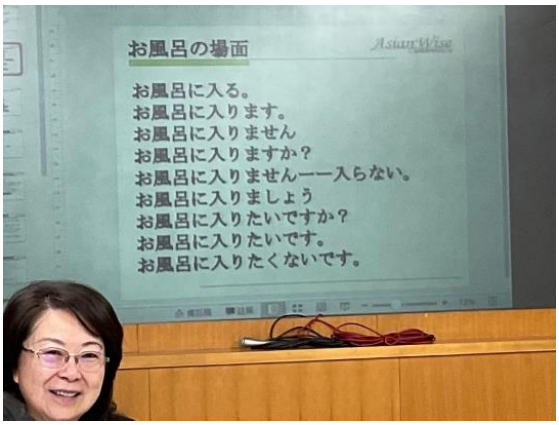
カリキュラムにおいて補助具の使用についても体験し、簡単な移乗手袋が介護者の作業負担を軽減し、高齢者の快適度も向上させるということを知りました。台湾では時に設備はあっても、介護者が使用方法を知らなかったり、使用に不慣れであったりします。日本では適正な補助具の使用を長期介護訓練制度で学び、また、

常に使用を奨励する政策を推進しているため、比較的容易に補助具の使用が推進できるということを理解しました。

この他、日本の多くのトイレでは高齢者が移乗しやすい措置がされており、そうした支援設備が充足している環境下では、高齢者の転倒リスクが低減され、自力でトイレに行く能力が高まります。これがすなわち、高齢者の尊厳向上になるということにも気づかされました。

（３）介護日本語の学習

日本語能力のない我々研修生に対し、王先生は高齢者と対話する時に使う挨拶の「こんにちは」や、付き添いプログラムで尋ねる「お水を飲みますか？」、入浴中に尋ねる「気持ちいいですか？」等を早くマスターさせるべく、復唱方法で教えて下さいましたが、介護施設での実習期間で、こうした簡単だが心のこもった挨拶、聞き慣れた響きの日本語の歌や歌謡曲は、高齢者と楽しくやりとりができるツールなのだと気づきました。



布施屋でのデイケア実習―高齢者介護の温かさを感じる

温かみのある介護というのが布施屋で感じた印象でした。デイケアセンターの設計デザインは、高齢者が慣れ親しんだ生活スタイルを維持できるように考えたもので、そのため、昔ながらの薪で煮炊きするお釜、菜園、休憩スペース、ソファーにテレビがあるスペース、暖炉のある食堂、和式の座椅子があり日当たりのよい静かな小さなスペースといったように、利用者が自分でくつろげる場所を選べるようなっていました。ここには熱意あふれる施設長がおられ、高齢者の興味を引きそうなたくさんのレクリエーションプログラムを考えていました。

（１）高齢者と一緒に作った昼ご飯

施設長は何度も「認知症や身体機能の衰えた高齢者であっても、まだ多くの生活能力が残っている。我々はそれを探すのを手伝うことができる」とおっしゃっていました。このデイケアセンターには開放式のキッチンがあり、介護福祉士が高齢者を真ん中のスペースに連れてきて、帽子やエプロンを着けるのを手伝うと、そこで簡単な下処理（米とぎ、野菜切り、ご飯をよそう等）をしてもらうそうで、みんなで一緒に作った料理は一層おいしくなると話していました。実際、観察していると、ほとんど残食がありませんでした。

（２）高齢者との万国運動会

実習期間中、幸運にも日本の祝日である体育の日があり、デイケアセンターでも運動会が開催されました。数日前から黒板に開催日のカウントダウンが書かれ、当日は朝一番から施設長も盛り上げ役をしていました。昼食も運動会弁当になり、午後、赤組と白組に分かれて運動会が行われました。手がひどく震える症状のあるおじいさんも付き添われて酒つぎ競争に参加し、本当に楽しそうで、楽しく、また感動する一日を過ごしました。

（３）入浴を満喫

入浴は日本の文化であり、日常のストレスを和らげるものだそうです。デイケアセンターでも、他の施設でも、身体が不自由な高齢者に入浴サービスを提供していました。高齢者が湯船につかるのを手伝いましたが、だれもがみな幸せそうに「気持ちいいよ～」と言って、本当によい表情をしているのを見ました。施設では入浴を嫌がる高齢者であっても、入浴後はみな一様にリラックスして落ち着いていました。台湾に入浴文化はないですが、日本で見聞きしたこの入浴は、緊張緩和に効果があるので、台湾の高齢者も体験できる機会を検討してもよいかもしれないと思いました。

結いの家での研修―高齢者がみな口から食事をとれるようにするという考え方

「本当に経鼻胃管チューブや胃瘻を使用していないのか？」最初は信じられず、施設の栄養士に確認しました。日本では疾病によって食事をとれない場合、通常は胃ろうを使用するし、約１０年前にはこの施設でも強制給餌をしていたが、今では意思がはっきりしている時に、将来胃管の使用についての意思決定をしておくというライフプランを実行するようになり、政府によるよりよい人生で終わるための介護政策の推進を受けて、最後まで口から食事をさせるようにしたということを知りました。

（１）情報共有と政策の奨励

ここでは個別摂食プランが多職種連携によって討論されています。メンバーには医師、歯科医、栄養士、言語療法士、物理療法士、看護師、介護士がおり、「経口摂取維持プラン」を共同で評価すると、政府から施設に給付金が追加されることになっていました。

（２）適切な食事の質が経鼻胃管チューブを使わない最大の要因

施設では、嚥下困難者をレベル別に細かく分類しており、食事の形だけでなく、おかずも口当たりが良く、飲み込みやすいように工夫していました。厨房はレベル別の介護食づくりに精通しており、中央キッチンではひとりひとりに適した材料で作られた半製品を使用していました。

台湾の主要なサービス施設では、増粘剤は主に嚥下訓練に使用していますが、常時利用しているところはわずかです。ここではユニットごとの給湯スペースに増粘剤が備え付けられており、介護者がわかりやすいよう入居者一人一人のお茶やコーヒーに添加する増粘剤の量を明記してありました。

（3）すべての力で食事をする

栄養のある食材を口からおなかに入れることで栄養摂取は完了とみなされます。実習最終日には、看護師と一緒に寝たきりの高齢者の食事介助をしました。最初は噛まなくても済む飲み込みやすい食事を提供するものと思ったのですが、実は高齢者にとっては、咀嚼をしないと飲み込む力が出てこないのだそうです。介助の過程では、看護師と私はただ一方的に励ましているだけで、解除されているおじいちゃんからは何も反応はなかったのですが、口を開けて、食事を入れてもらうのを見ていると、彼の食事の好みがわかりました。老いても、食事ができるということは幸福をもたらすものなのだと思い知りました。

台湾では、経鼻胃管チューブ使用の選択の機会があるでしょうか。介護の現場では、経鼻胃管チューブを付けた後に、例えば、自分でチューブを抜かないように拘束したために活動力が低下し、筋肉が急速に衰えてしまった等、家族の思いもよらないような多くの問題に波及することがあります。

日本での研修後、台湾での経鼻胃管留置術の需要を減らすには、栄養士による、より適切な食感の食事の提供、嚥下困難者にもっと噛む力が必要になる食事の提供、チーム間評価による摂食能力の調査、本人と家族に強制給餌の要否をわかりやすく客観的に認識させるといった役割が期待されると考えるようになりました。

日本での介護交流によって給食をさらに美味に一味噌味の台湾クレープ

日本での研修期間中、台湾でできそうなことを考えてみました。時には理想的すぎないか、実際に行動できるかどうか疑わしくも思っていましたが、台湾での栄養士の生活に戻ると、今回の６週間の研修期間中に隠したアイデアの種が一つずつ芽を出していることに気がつきました。佐久市の健康長寿の秘訣を共有しようと、デイケアセンターで学んだ日本人が愛してやまない味噌を使ったオートミール豆腐パンケーキは、栄養が必要な台湾の多くの高齢者にも好評です。

施設での食事の食感をよくして、お茶やジュースに増粘剤を使用することで、高齢者の水分摂取意欲も増し、むせこみも軽減できるのではないかとグループで討論しています。

最後に、日本台湾交流協会、アジアン・ワイズ社、佐久大学及び実習先の施設に対し、枚挙にいとまのないほどの知識を与えてくれたことを感謝します。これらが今後の台湾の長期介護の発展に影響を与えることと期待しています。